

定例教育委員会会議録

(令和3年1月8日開催)

岡谷市教育委員会

定 例 教 育 委 員 会

日 時 令和3年1月8日(金)
15時00分～
場 所 市役所6階 605会議室
署名委員 草間職務代理人、太田委員

【 次 第 】

○ 開 会

○ 教育長報告

○ 議 題

1. 小中学びの連携と小中一貫教育の研究について【資料No.1】 (教育総務課)

○ 報 告

1. 年度末・新年度の行事について【資料No.2】 (教育総務課)
2. 市立岡谷図書館アネックス(別館)の設置について【資料No.3】 (生涯学習課)

○ そ の 他

- ・行事等について(各課)
- ・その他

【次回開催予定】 2月10日(水) 定例教育委員会 9時30分～ 6階 605会議室

出席委員

教育長 岩本 博行、職務代理者 草間 吉幸、教育委員 太田 博久、
教育委員 高木 千奈美、教育委員 藤森 一俊、

欠席委員

教育委員 小平 陽子

事務局（説明員）

教育部長 城田 守、教育総務課長 両角 秀孝、教育総務課主任指導主事 竹内 良之、
生涯学習課長 山田 勝由紀、スポーツ振興課長 小河原 義友、川岸小学校 教頭 林 淳子、
教育総務課統括主幹 小口 明彦、教育総務課学校教育主幹 横内 哲郎、教育総務課主査 芳沢 幸祐

<会議録>

○開 会

岩本教育長： 皆さんこんにちは。新型コロナの状況が大変厳しいですけれども、今年も昨年同様、力を合わせていきたいと思います。よろしく願いいたします。それでは、令和3年1月の定例教育委員会を始めたいと思います。本日の議事録署名委員ですけれども、草間職務代理者さんと太田委員さんをお願いをしたいと思います。

なお、本日、小平委員さんは欠席されますので、よろしく願いいたします。

それでは最初に私から教育長報告をさせていただきますので、よろしく願いいたします。

○教育長報告

1. 年未年始休業について

コロナ禍の中、今年の年未年始は、帰省や初詣を控えたり、なるべく人混みを避けるなど、例年とは異なる形で新年を迎えた方が多かったのではないのでしょうか。

さて、市内小中学校におきましては、この休業中に大きな事故もなく無事、始業式を迎えることができました。心配していた新型コロナウイルス感染症であります。昨日、岡谷市で3人の方の感染が報告され、非常に心配な点もある訳ですが、おかげさまで児童生徒は元気に3学期の授業に取り組んでおります。

こうした中、東京都をはじめとする1都3県に対し、政府が緊急事態宣言を発出するなど、都市部の緊張感が高まっており、県内におきましても予断を許さない状況が続いております。

一方、2月下旬からワクチンの接種が始まるとの報道もあり、明るい兆しも見えつつあると思っております。これから中学3年生は高校受験を迎える時期に入りますが、感染防止対策を徹底して、無事に受験を乗り切りたいと願っているところでもあります。

2. シルクマスクの寄贈について

先月22日、岡谷南部中学校の3年生が作成したシルクマスク15枚を寄贈していただきました。

生徒たちは、総合的な学習の一環として、コロナ禍の中で頑張っている地域の方の役に立ってもらおうと、「地域活性化プロジェクト」として自分たちでマスクを作り、これまでに約130枚を保育園や福祉施設に配布してきました。シルクマスクは、その第2弾として、岡谷ならではの特別なマスクを作りたいとの考えに立ち、岡谷蚕糸博物館に相談したところ、縁あって丸興工業OBの神戸さんから、シルクの反物をいただくことができ、作成に取り組んだものであります。

今、お手元にそのシルクマスクをお配りしております。寄贈式には、反物を提供いただいた神戸さんにもご出席いただき、生徒たちは感謝を込めて手作りのマスクを神戸さんにも生徒からプレゼントしておりました。生徒の皆さんからは、シルクマスクは針が通らずに大変苦労したというような感想を伺いました。

また、地域資源を活かした取り組みを通じて、岡谷スタンダードカリキュラムがしっかりと定着していると感じているところでもあります。

みんなの思いが込められたシルクマスクは、岡谷のPRに役立ててほしいという願いから、市外から岡谷市に転入してくる児童生徒へ贈り、岡谷を知ってもらおうきっかけになってもらえればと思っております。

3. 成人式の延期について

先日、取り急ぎ電話連絡させていただきましたが、明後日の1月10日に開催予定でした令和3年岡谷市成人式を5月2日日曜日に延期とさせていただきます。成人式がさらなる感染拡大の要因となる可能性が否定できないこと、また、参加者及び市民の皆さまの健康と安全面を優先に考え、延期と判断させていただきました。式は延期いたしますが、成人の日は、人生の節目を祝う大切な日でありますので、祝意を表したいと考え、新成人の門出を祝うフォトスポットを、市役所1階市民ロビーに設置をしたところであります。

バックパネルの武井武雄先生の「はるがきた」には、鳥やチョウなどが花の入った籠を引く様子が描かれ、大変温かみのある心和む作品であります。こんな時だからこそ、今後の人生に希望が持てるよう、家族や友人との記念撮影に利用していただければ幸いです。明日からの3連休は、午前10時から午後3時まで、職員が待機して市民ロビーを開放します。

なお、延期の周知につきましては、先月22日に対象者全員に対して、「延期のお知らせ通知」を送付するとともに、ホームページにも掲載いたしました。今後は、全国的な感染状況に留意しながら、安全・安心な成人式の開催に向けて、準備をしっかりと進めてまいりたいと考えております。

4. 岡谷市民元旦マラソンについて

2021年元日の早朝、静寂に包まれ、薄っすらと雪化粧した諏訪湖畔には、多くの方がオレンジ色に染まる諏訪湖を眺め、八ヶ岳連峰から登る初日の出を一目見ようと集まっていました。この様な中、「第42回岡谷市民元旦マラソン」を岡谷市陸上競技協会の皆さんに協力をいただき、開催したところであります。

今年は、残念ながら新型コロナウイルスの影響で、開会式は行わず、参加者ごとのスタートといたしました。ご家族、仲間、同僚、個人など、約150人の皆さんに参加いただきました。

近年は、特に家族での参加が多く見られるようになり、大切な方と一緒にお互いの健康などを願いつつ、楽しく諏訪湖畔を駆け抜け、汗を流し、絆を深めるなど、思い出の1ページを刻んでいただくことができたのではないかと思っています。

5. 第70回諏訪地方スケート大会の中止について

このスケート大会は、昭和27年に諏訪湖の高浜沖で第1回大会が開催されて以来、6市町村の持ち回りで、昭和53年までは学校の校庭リンクや蓼科湖、白樺湖、蓼の海で行われ、昭和54年から平成4年まで諏訪市のパイピングリンク、平成5年からは茅野市国際スケートセンターと岡谷市やまびこ国際スケートセンターで交互に開催されており、出場選手の中から数多くのオリンピック選手が輩出されるなど、歴史あるスケート大会であります。

この大会は、諏訪地方市町村教育委員会協議会が主催し、6市町村と長野県スケート連盟などが後援するもので、今年、原村の当番で2月11日に茅野市国際スケートセンターでの開催に向けて準備を進めてまいりました。中止につきましては、先般、諏訪地方市町村教育委員会の6市町村の教育長で協議させていただくなかで、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、特に、約200人という参加者数の多さ、小学1年生から一般の80歳代までとなる参加者層の幅広さ、会場ドーム内の密回避が困難であることなど総合的に判断し、やむなく中止の決定をさせていただきました。

岡谷市の出場選手は、大会に向けて準備を進めており大変残念ではありますが、1年後の大会に向けて更なる努力を続けていただければと思っております。

私からの報告は以上でございますが、ご質問、ご意見がございましたらお願いいたします。

草間職務代理者： 成人式について、お聴きしたいのですが、5月に延期していただき大変嬉しいことだと思っております。しかし、子どもたちや成人式を迎える人にとっては、もう一度、5月に成人式の準備の必要があるのでは5月に開催した場合、一月に出席を予定していた400人のうち、大体どのくらいの方が出席するのでしょうか。

事務局(山田)： 正直、どんな反響があるかというのは、今は想像がつかないのが現実です。というのは、ちょうど高校を卒業して2年ということになるので、専門学校や短期大学へ行っている方が卒業されて、就職するというタイミングになってきますので、今、聞いている話の中でも、5月だと就職しているので出席できませんというような声は聞いておりますし、逆に1月は帰れないけれども、5月の連休だったら帰れるかもしれないという声もありますので、再度、出席をとってみたいとわからないというのが今の状況です。

○議 題

1. 小中学びの連携と小中一貫教育の研究について（教育総務課）

岩本教育長： それでは議題1の小中学びの連携と小中一貫教育の研究について、事務局から説明をお願いします。

<事務局（両角・竹内）、林教頭から学力向上の取り組みについて説明。>

事務局(両角)： 本日の議題としております小中連携・一貫教育につきましては、岡谷市魅力と活力ある学校づくり推進プランの本編とハード整備版のそれぞれにおきまして、今後の取り組みの充実や今後の検討としている項目となります。

本日は現行の国の制度や本市の小中連携の取り組みの状況等の説明をさせていただきながら、今後に向けた研究協議というような位置付けで議論をお願いできればということで、資料の調製をして参りました。

小中連携・一貫教育ということで、まず、小中一貫教育の制度化というところですが、ご存知の通り、義務教育につきましては、法により小学校6年、中学校3年の9年間の就業年限が定められております。全国各地、岡谷市も含めて小中学校は基本的に、これらの規則に則って小中学校の教育を実施しているという状況です。そのうち、小中一貫教育に関しましては、平成28年度までは統一的な仕組みがなく、各地において特例措置といった取り組みの中で、配置・開設がされていたという状況でしたが、学校教育の多様化・弾力化を推進するために平成28年4月に学校教育法が改正されました。これに合わせて、9年間を通して義務教育を行う義務教育学校の創設など、小中一貫教育が制度化されたというのが経過となります。

現在の枠組みを図で示しております。小中連携、それから一貫教育というような枠組みがありますが、まずは一番の大きな枠である小中連携教育の一般的な定義となりますが、記載の通り、小中学校段階の教員が互いに、情報交換や交流を行う。それから、小学校教育から中学校教育への円滑な接続を目指す様々な教育の取り組みを行うことを、小中連携教育という定義としています。その中に小中一貫教育がありますが、これは小中連携教育のうち、小中学校段階の教員が目指す子ども像を共有し、9年間を通じた教育課程を編成し、系統的な教育を目指す教育を小中一貫教育というような位置付けにしております。

その中にさらに四角い枠組みがありまして、先ほど申し上げました義務教育学校というものがあります。今まで小学校、中学校といった学校の種別がありますが、それに加えて義務教育学校という、制度上の学校種が現在は設けられております。本来であれば2人の校長先生が必要なところを1人の校長先生にして、その下で組織も一つ、9年間の目標も一つで一貫した教育を編成して実施する学校が義務教育学校という位置付けとなります。その右に小中一貫型小学校・中学校というものがあります。これはそれぞれ独立した組織が一貫した教育を行います、それぞれに学校長や教職員組織も備えているというような学校の種類になります。

その中に併設型小学校・中学校、それから連携型小学校・中学校という切り分けが一般的にされておりますが、併設型というのは、施設が繋がっている学校、それから連携型というのは、距離が離れていても、この考え方の目指す子どもの教育・共有をして教育を行うような学校を連携型一貫校という位置付けにしています。下の方にも書いてありますが、いずれの学校も施設の形態というのは、一体型であっても、隣接型でも分離していても問わないという中で、このような選択ができるというのが、現在の制度上の枠組みということになります。

下にも文面ございますが、こうしたイメージ見ていただきますと、一番大きな外の枠、その内側というところから見ますと、小中一貫教育というのは、実は大きく分けると連携教育と一貫教育という二つがあり、一貫教育は、小中連携教育のうちの一つということがわかれると思います。

本市におきましては、この小中一貫教育の目指す目的を果たせるように、平成28年度から小中学びの連携といたしまして、学校の垣根を越えた児童生徒や教員間の連携交流に取り組んでいるほか、幼稚園保育園と小学校の接続、それから連携といったことで、連携交流事業を行っています。この部分につきましては後段の方で、別の資料で改めて状況等の説明をさせていただきます。

なぜ、こうした一貫教育といった部分が求められてきたのか、求められているのかということころを簡単にまとめてありますが、背景としまして、例えば、小学校高学年における身体的発達の早期化というところが、現在の学校現状の課題の一つになっているところ。それから、中学の進学に伴って、環境変化への不適応、いわゆる中一ギャップというように言われておりますが、中一ギャップへの対応等が求められている中で、従来の6年制と3年制といった制度の枠組みを維持しながらも、地域の実情を踏まえた、例えば、4年制と3年制と2年制というような切り分けによる学校運営や、あるいは5年制・4年制といった切り分けによる学校運営といった弾力的な設定ができるように、国の方で制度が生まれたということが背景と制度化に至る繋がりの部分となります。

3の小中一貫に係る学校種ごとの主な要件等では、この小中一貫教育に係る学校種ごとの主な要件、制度上の要件をまとめてあります。すべては説明いたしません、左側の義務教育学校については、就業年限が9年、先ほど言ったように1人の校長先生の下で、前期課程と後期課程で、教育を実施するというようなことがわかるかと思えます。それから、右側の一環型の小中学校は、施設の併設型と連携型という制度上の括りがあります。こちらの内容については従来の小学校中学校とほぼ同じ作りになっていますが、いずれにしても、中ほど辺にある教育課程については、どのような学校の形であろうが、共通して9年間の目標を設定し、9年間の系統性・体系的に配慮がされている教育課程を設けていくというような学校になります。

4の各地における導入等の状況ですが、全国でどのような導入の状況になっているかという簡単なまとめとなります。平成29年度までの国の資料がありましたので、その時点ということになりますが、現在、下の通りとなります。義務教育学校と小中一貫型を合わせまして、この時点で約300校。これがもうすでに計画されている取り組みが進んでおりますので、2023年度までにさらに増加となるような見込みという状況です。

資料の中にも記載しておりますが、長野県であれば、現在、義務教育学校が2校、それから併設型小中一貫校という位置付けで1校が既に開設をされています。また、諏訪地域の中では、現在、諏訪市と茅野市で小中一貫による学校の設置といった具体的な計画が進められているという状況です。

先ほども冒頭申しました通り、本市に関しましては、魅力と活力ある学校づくり推進プランのハード整備版の中で小中一貫教育の検討を進めていこうというような位置付けをしているという状況です。簡単でございますが、制度の総論的な部分は以上でございます。

続きまして、資料の3ページ以降につきましては、現在では一番外枠にある小中連携という取り組みの部分の具体的な内容について、竹内先生の方から説明をさせていただきます。

事務局(竹内)： それでは3ページをご覧ください。

岡谷市の具体的な部分ですが、先ほど課長の話の中で平成28年度からということがありましたが、その前年の27年度から校長会の中で、どんな小中連携の形が取れるだろうかということの研究が始まりました。

元々、小学校と中学校の間では、小中連絡会というものがあります。ただそれは事務的な連絡でした。それが事務的なものだけではなくて、そこからさらに発展させて活動、交流を盛り込んでいったらどうなのかということがスタートラインでした。そこから始まりまして、まずは目的となりますが、6個の◇形がありますが、見ていただいて感じる通り、交流活動が中心となっており、子どもの交流であるとか、あるいは職員間の交流であるとか、そういう本来、行っているところから始めていくという、そこにまた意味を付け加えて、付加していこうところからでした。

まず、歴史的と言いますか時代を追っていきますと、まず一番として日常化を図っていこうということで、まずは中学校ではこんなことをやっています。小学校では、今こんなことをやっていますということを、学校には掲示板があるのですけれども、児童会や生徒会の掲示板を使って、そういうところで紹介をしていく活動となります。

それから2番、今はもう少し進みまして通信となります。〇〇中学校通信、〇〇小学校通信というような、そういうものの児童会や生徒会を中心とした交流活動を行っていく。当時、ちょうど岡谷小学校、田中小学校、神明小学校の3校の統合がありましたので、統合3校の間で

「かけ橋」という、お便りを交し合っていました。そんなところを参考にしながら、小学校、中学校の間でもやっていけないのではないかという、そんな取り組みから始まっていきました。

そして、今でも継続し拡充しているのが、3番にあります小中学びの連携というものであります。元々、OEEという名前をつけて読んでいて、Okaya Elementary school students junior high school Experience daynoの略式でOEEと言ったのですが、OEEが何のことなのかわかりづらいので、2年前から名前を変えまして、小中学びの連携という誰にでもわかる名前にしようということをやっています。

それを大きく分けまして、1から4まで4つ組んであります。まず1ですが、小中学びの連携1というのが、7月ごろに行われますが、小学校6年生の児童が自分の中学校区の中学へ訪問し、中学校の授業参加をします。授業参観した後、いじめ根絶子ども会議という岡谷市では何年にもわたって行っているかなり伝統的な行事になりましたが、いじめ根絶子ども会議が全部で3回ありますが、3回目が9階大会議室、あるいは諏訪湖ハイツでの発表になりますが、ここでその2回が兼ねて行うという子どもの交流であります。それが小中学びの連携1、残念ながら、今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止ということになりましたが毎年この時期に行われています。

続いて小中学びの連携2となりますが、これは職員の交流となります。夏休みが始まったところで、岡谷市教職員研修というものをやりますが、これは悉皆研修でして、岡谷市教職員の皆さん全員にお集まりいただいて行うという、なかなか悉皆研修をやっている市町村というのは、県下どこを見てもほとんどありません。その位、一体となって、今、職員が研修できるという状態にあります。内容ですけれども、毎年、全体講師としまして福井大学の副学長であります松木健一先生をお呼びし、全体を指導していただいております。基調提案、実践報告、それからテーマに沿った熟議、講演、午後は先生方の教科、領域に分かれて分科会に分かれた検討会や今後の学び、新たな学びに向けての熟議を行う1日の研修、これが学びの連携2のステージとなります。

小中学びの連携3ですが、3は3-1と3-2に分かれています。これが一番大事にしている部分の一つですが、3-1は小学校の教職員が中学校に赴き、中学校の授業を参観し、研究協議を行うものです。その反対が3-2でありまして、中学校の教職員が小学校へ行き、小学校の授業を見て、研究協議をするということで、お互いの小中学校の枠を越えた授業参観を行い、小学校ではこういうことをして、中学に繋がっていているのだな。中学ではこういう勉強があるから、小学校ではこんなところを積み重ねていこうというところを共有し合って、そして子どもの成長につなげていくという小中学びの連携の中でも大事なステージが、小中学びの連携3となります。今年は新型コロナの影響もあり、あまり大きくはできなかったのですが、昨年度は岡谷東高校も、ぜひその中に私たちも混ぜて欲しいということで、岡谷東高校は岡谷南部中学校区ですので、岡谷南部中学校、岡谷田中小学校、湊小学校に岡谷東高校の先生方が行き、私たちは岡谷東高校の授業も見させてもらいました。その時は市のすべての学校に声をかけまして、それぞれの学校から何名かが岡谷東高校の授業を見るという形で、昨年度は小中学びの連携3というものが、小中高というところまで広がった道筋がついております。

小中学びの連携4になりますけれども、小学校6年生の一日入学となります。小学校6年生が中学体験、学校体験、授業参観する。中学1年生がホストとなりますので、中学1年生による学校紹介、部活動紹介が行われます。特に部活動紹介は楽しみにしている部分であります。それから校長講話を聴くというところで、実際の中学校入学に向けた直前の意識付けという部分、それから連絡調整というところになります。

このような形で小中学びの連携1から4を通じて、岡谷市では小中の連携を深めているわけですが、留意事項というところに幾つか書いてありますが一番上の□、中学生の憧れとか中学進学への期待感ということがありますが、小学生にとっては、この連携を行うことで中学へ憧れの気持ちを持つ期待感を高める、不安な部分もあるでしょうけれども、その不安を少しでも和らげて、先ほど中1ギャップという話がありましたが、その解消にも繋がっているのだと考えております。

それから、3つ目の□であります、小学校の先生が中学校、中学校の先生が小学校を学ぶ

良い機会ということでもあります。人事異動の中で両方を経験している先生もいるわけですが、片方の勤務経験しかない先生も多数いるわけで、そういう先生方も含めて、お互いがどんな発達段階の中にあって、どのようなコンテンツを行っているのかということ、これを共有し合う非常に貴重な機会となっています。

最後の□ですが、小中学びの連携はこれで4年が経ちました。各中学校区で工夫した取り組みがなされるようになってきて、先ほど申しました交流活動というところを中心に、これからはこの小中連携に、小学校同士の連携、幼保小の連携、あるいは、先ほども申しましたが、小中高の連携といった部分も取り入れていく。そういう方向で発展を願っております。もうその一端が始まっております。幼保小連携というところでは、アプローチ&スタートカリキュラムというものを今、市教委、校長会等で作成しており、その具体的な委員会が立ち上がっております。そちらの委員であります川岸小学校の林先生、本日お越しいただいておりますので、林先生にこの幼保小の連携についてご説明いただければと思いますよろしくお願いします。

林 教 頭： 川岸小学校の林と申します。よろしくお願いします。

アプローチ&スタートカリキュラム推進委員会では、幼保小の接続期における子どもたちの支援のあり方について、園と小学校が連携を図り、一緒に考えています。小学校に入学したばかりの1年生の中には、集団行動がとれない、授業中に触ってられない、学校生活に馴染めない子がいます。これはこれまでの園の生活とは異なる新しい環境に不安を抱いたり、適応できなかつたりすることが原因と考えられます。こうした状況が長期欠席に繋がる事例も見られます。そこで委員会では、厚生労働省保育所指針や文科省、中央教育審議会幼児教育部会で挙げられている幼児期の終わりまでに育て欲しい姿というのを目指し、環境の整備や系統的な姿勢を進めるためのカリキュラムについて検討を進めています。例えば、まず入学前には小学校での生活を想像して、基本的な生活習慣の習得、それから集団行動の基礎となる活動により、小学校の必要な力を身につけ、子どもたち自身が小学校でも、僕は頑張れそうだというような自信を得られるような支援が必要になるかと思えます。また、運動会での旗拾い、一日入学など、小学校での体験を通して小学校への期待感を持つことが大切だと考えます。

次に入学後ですが、学校探検などを通して、学校施設や先生たちを知ること、給食の準備や清掃などを友達と協力して自分たちで進めること。また同学年や上級生の新しい友達と関わることなど、自分自身の成長を実感しながら、主体的に決して無理なく活動を広げていくということが必要かと思えます。

このように、園と小学校がそれぞれの活動について情報交換を重ねながら、この「おかや絹結プログラム」を岡谷市の幼保小連携で進めていけたらと思えます。そして、このプログラムが、先ほど竹内先生のお話にありましたが、小中の連携にも繋がっていくことを期待したいなと思って進めています。

事務局(竹内)： ありがとうございます。教育委員さんの皆さんにやっていただいている仲良しプログラムも、これの保護者版というような部分も見えるかと思えます

高等学校との連携はかなり進んできています。ものづくりロボットプログラミング事業ですが、岡谷工業高校の生徒さんに来ていただきながら、神明小学校でティーム・ティーチングをやっており、こちらにつきましては、中学校の技術科の先生も入っていただいておりますので、小中高の連携の道筋がついております。それから、放課後居場所づくり事業における交流ということで、岡谷市はいち早く放課後居場所づくり事業を立ち上げて、それが充実しているわけですが、神明小学校の「神明ラボ」では、岡谷工業高校のラグビー部、茶華道部にきていただいて、タグラグビーや茶道教室をやっていただいております。岡谷田中小の「あやめ基地」では、岡谷南高校のバドミントン部、サッカー部にきていただいてスポーツをやっていただいております。長地小学校の「おさっちあ」では、岡谷南高校の理科部にきていただいて、理科の実験工作、それから英語でのコミュニケーションを英語部にやっていただいております。また、岡谷田中小学校では、岡谷東高校の英語部にきていただいて、6年生の外国活動のところに、英語の皆さん入っていただいて一緒に交流活動をしているということで、ティーム・ティーチングのような形で授業を盛り上げてくださっています。こんなところで小中高の連携も今、始まりつつあります。

それから、小中連携の部分的な地域的な連携であります。川岸小学校と岡谷西部中学校、こちらの学校は、岡谷西部中学校に上がるのは川岸地区にある保育園から川岸小学校、そして岡谷西部中学校へ上がっていく地域になっております。その地域が小中連携を探っていく上で、一番実務的に動きが行われる部分であるということ、学校の方でわかったださっていて合同職員会というものを立ち上げて、何年かやったださっています。それから川岸小学校から1名、岡谷西部中学校から1名、今年度、福井大学教職大学院に所属研修ということで研究主任級の先生に行っていただいております。地域を挙げた研究テーマを背負って研究をしていくということで院生になってもらって、小中連携というところも加味しています。先日も福井大学から、准教授の先生がお見えになって、2校での交流が行われたというところありますので、その辺に関して林先生から、ご説明よろしいでしょうか。

林 教 頭： 川岸小学校と岡谷西部中学校は年2回、合同職員会を行っています。小中それぞれの課題や共通の課題を出し合ひまして、目指す児童生徒の姿を共有して、私たちはどんなふうに取り組みをしていったらいいのかということ、ざっくばらんに一緒に考える会であります。昨年度は、両校の研究主任が発起人となりまして、学力向上に向けて、たくさん課題のある学校ですけれども、その取り組みについて職員が考えていこうということで、どんな授業をしていったらいいのか、自分の授業のどこがいけないのかというようなことを具体的に考えました。先ほどお話がありました小中学びの連携というところで、それぞれの授業を見合っ、ここはもう少し改善点だねということ、お互いに評価し合ひました。今年度は、総合的な学習の時間のあり方について、日頃の悩みや問題点を出し合ひました。今月、第2回目を予定しております、成果や課題について、また話し合ひをしていく予定です。

このように小学校から中学校に上がるまで、どういう力を付けていけばいいのかということ、私達も考えました。それから中学校は、その力をどうやって伸ばしていけばいいのかということ、その系統的な指導のあり方を考える場となっております。川岸の子どもたちを小中が一緒になって育てているのだということ、これを改めて実感することができました。それから、だからこそ私達の責任が重いのだなということ、痛感しました。また、職員会を行うことによって、職員同士がお互いに名前を知ることができます。今まで隣にいらながらも、先生方の名前や顔を知らなかったということも問題だと思っておりました。名前を知って気軽に話ができるようになったというのは大きいです。またバスケットボールなどをして、交流を深めています。

それから職員だけではなく、子どもたちとしても中学校の先生が小学校の体育の授業をやっていたり、より専門性の高い授業をしていただいたことで、中学校への期待を膨らめられたり、プログラミングの授業を中学校の先生がしてくださって、小学生の中では、中学校の先生は怖いというイメージ持っている子どもたちがいるのですが、中学校は優しく楽しい授業をしてくれると子どもたちが感じて、安心感を持って中学校へ進学できると感じています。

また、特別支援学級の配慮が必要な児童については、気軽に授業を見に行ける、また小学校の特別支援学級の子どもたちが、中学校特別支援学級を体験させていただけるということを頻りにやることで、中学校の先生が小学校での様子を見に来たりすることが気軽にできているということで、支援のあり方を考える面でも、子どもたちの安心感でもありがたいなと思っております。

事務局(竹内)： ありがとうございます。4ページの一番下のボックスをご覧ください。最初の目的というところを中学校体験や交流職員バスケなど、そういうところからスタートしたわけですが、目的が進化し、発展しました。体験活動の充実から端を発したわけですが、1から5までご覧ください。

中学校小学校の授業改善・学力向上への視点や、具体的な授業の連携、こういうところに行っております。2番の小中教職員の熟議の推進と充実、授業改善の視点を通じた協議、研修のあり方、小中が一緒になってどのように研修して高めていくかということ、3番の小中教職員連携のあり方・児童生徒の連携のあり方。4番、これは続いておりますが、子どものいじめ根絶会議の位置付けや、その意義・拡充です。いじめの解消、安心・安全の居場所づくりというところの充実であります。それから5番、林教頭先生の話の中にもありましたけれども、特別支援教育、特別支援活動を持ち方の件と、連携のあり方の工夫。困っている子どもへの合理的配慮、あるいは子どもに応じた多様な学びのあり方について、小中連携をしながら考えるステージに今に至っている

というところで、ハード面を今どうするか、新しい校舎を作るというようなそういう打ち上げ花火的なことではないですけれども、ソフト面で小中の先生方が今あるこの環境の中で、何ができるかということを校長会が中心となって、もう5年も前から考え始めて、今、活動が4年間繰り返されている現状であります。

事務局(両角)： 現在の本市の取り組み、それから大きな枠組みという部分のご紹介を説明させていただきました。今後に向けて、ぜひご感想ご意見をよろしく願います。以上でございます。

岩本教育長： 事務局からは以上となりますが、現場の声を解説員がしっかり伝えてくださいますので、それは早速、委員さん方からご質問、ご意見がありましたら遠慮なく出してください。

草間職務代理者： 林先生にお伺いしたいのですけれども、幼保小については、おかや絹結プログラムとして、きちっとした体系的な構想が来ていますが、今ご説明いただいたとおり、小学校と中学校についても、合同職員会議を行ったり、先生の交流を行われていますが、まだ、おかや絹結プログラムのような体系的な発表するようなものはできていないわけでしょうか。合同職員会など、部分的にやられているのですけれども、全体として、小中の連携の目的が良くわからないのですが、何のために、職員同士が交流をしたり、早く言えば、おかや絹結プログラムでの、「繋げよう子どもの未来 育てよう子どもの夢」というような大局的な目的の基に、小中の連携を進めているというのが、私にはよく見えないのですけれども。

林 教 頭： 小中の連携で具体的なこういうはっきりした目標の言葉みたいなものは、川岸小も岡谷西部中も掲げているものはないのですけれども、合同職員会で、今年はこれでいこうっていうものを全体ではまだないのですけれども、岡谷西部中では、今年はこれでいきましょうというのは作って進めているのですが、小中の構想ものが必要じゃないかということですね。

草間職務代理者： 例えば将来、川岸地区はこういう形態が望ましいのではないかとという将来の目標というか、そういうものに向けて連携を進めているのか、その連携を目的でやっているのかという、その辺について教えてください。

林 教 頭： 漠然とした将来の目指す姿というのは、今までも持っております。ただ、おかや絹結プログラムのような形には作っていませんけれども川岸の子どもたちが、どういう子どもに育ててもらいたいというのは小中両方で考えています。

岩本教育長： 川岸小と岡谷西部中学校については、体系的なこういうカリキュラムができていないわけではなく、これからの数年後を見越して、どのようにしていくかということについては、校長先生方とは私は話をしていますけれども、まずは教育委員会がしっかりした方針を持たなければいけない。まだ、その段階でこれから検討していきます。そのあと、現場の先生方、あるいは地域の皆さんの声をお聴きする中で、総合的にそういったプランを構築していく形ではないかと思えます。今は小中がいかにか子どもたちの学びの連携を図っていくかということに重点を置いていただいて、子ども同士、先生同士、一生懸命連携を図っていただいているところであります。

太田委員： 1人の子どもの視点に立った時に、子どもの成長のプロセスに関わる学校、先生、大人が連携をしていくというのは、全面的に私は良いことだと思っておりますし、岡谷市が今、こういう形で先に体制ありきではなくて、いろんな形の連携をすることそのものをまず最優先にして、地道に組み立てを始め、取り組んでいるということについて、方向性としてこの方が良いだろうなと思っております。

その上で、川岸小と岡谷西部中がいわゆる意識的にこういう連携をはじめてから4年目になると思いますが、こういった取り組みをこれから進めていくにあたっての背景という最初の説明のところに、中1ギャップをできるだけ少なくしていこうというようなことが大きな背景の理由として挙げられているのですが、正確でなくて結構なのですけれども、例えば、その辺のところは、今、川岸小と岡谷西部中学校で今までやってきた中で、多少のデータも含めて、明らかに改善してきている部分があるなど、提示ができるようなものは何か出始めているのでしょうか。

林 教 頭： 不登校傾向だった子どもたちが、中学に行ってどうなるのだろうということを心配していて、その辺りは、最初の小学校の時点で、こういう傾向があってこんな支援をしてきて、今はこういう状況ということをお知らせすることで、不登校になりにくかったりします。逆のこともありまして、小学校では行けていたのに中学校では不登校傾向になるということもありましたので、何とかそういう子どもたちが減ってくればということでやっている部分もあります。その辺が

改善されているという部分もあれば、引き続き課題という部分もあります。学習については、自己表現をもう少し打開しようと、中学校も引き続きというように同じ目標に向けて、職員が取り組んでいることで子どもたちにも良い影響が出ているのではないかと思います、申し訳ありませんが、数的なところはちょっとはつきりしません。

岩本教育長： 小中連携、小中一貫の目標でよく言われるのが、中1ギャップの解消です。つまり、中学に入ってから不登校になる子どもを1人でも減らしていくという面でどうであるかというのを調べてもらったわけですが、この4年間で数値は減ってきています。平成28年は4人。29年度は6人。これは中学で初めて長期欠席・不登校になった子どもの数ですけれども、平成30年からは2人、2人と着実に減ってきています。しかも不登校の数は、逆に全体では増えているという状況の中で、新規の不登校になっている子どもの数が減っている状況ということは、私は少なからず、学びの連携というものが非常に大きいのではないかと思います。特別に本当に併設校のように小中で一緒になって、中1ギャップを防ぐというような取り組みができるようなところは良いですけれども、岡谷市のように別のところでやっても、連携さえしっかりやれば、中1ギャップというのは、ある程度、防ぐことができるのではないかと思います。

高木委員： 以前から、小中の連携、幼保小の連携が必要と言われていた中で、今こうして、ここまで連携ができてきていて、おかや絹結プログラムという形になってきていて本当にありがたいことだと思います。この繋がりが本当に絹糸のように、強く長く、ずっと幼保小から中高まで繋がって行くのだらうと思うと、本当に岡谷市の取り組みというのはこれからもしっかり繋がって行く大切な取り組みだと思います。今日は林先生にお忙しい中、おいでいただいて、現場での声を直接、お聞きできるというのは本当に貴重な機会だなと思っています。本当は私たち教育委員が学校へ出向いて、お話をお聞きしなければいけないところなのでしょうけれども、今年は運動会も音楽会もお邪魔することができずに、すっかりご無沙汰してしまって本当に申し訳なかったのですけれども、前回の定例教育委員会でも校長先生方においでいただいて、今日は林先生にいただくことができ、お忙しい時間の中でもこうしてここへ来ていただいて、お話を聞けるということは、とてもありがたいと思いました。今日はありがとうございました。

事務局にお聞きしたいのですが、2ページの小中一貫に係る学校種ごとの主な要件等の表の中の標準基準の義務教育学校と小中一貫型小学校・中学校を作る時の学級数の基準について教えてください。

事務局(両角)： この学級数の基準というのは、右側の方がベースになると思いますが、どのぐらいの規模かというところで小学校の方について、例えば12クラスと言いますと一学年2学級、18クラスといえば一学年3学級となります。要は学校規模ですと、そのぐらいが適正だろうということで設定されています。クラスの人数については、国の基準では一クラス40人というところが現在では示されて、それが今、政府の方で35人学級というような少人数化というのが見込まれているところなのですけれども、そういうところからしますと、概ねこの学級数というのは、普通学級で学校運営ができるぐらいで基準化されています。義務教育学校の標準基準は、それを9年間に足し上げていますので、18学級から27学級になります。

高木委員： 非常に小規模校の一学年1学級ずつの小学校中・中学校が一緒になっても、義務教育学校とかそういうものにはならないということでしょうか。

事務局(両角)： その辺については、地域の実情に応じてというところもあるかと思います。これは標準基準というところになりますので、例えば、小さな町ですとか過疎地域でも義務教育学校は開設できます。

岩本教育長： 資料にあります義務教育学校的美麻小中学校などは非常に小規模です。これはあくまでも標準の基準ですので、それぞれの状況に応じてということになります。

藤森委員： 林先生、今日はお忙しい中ありがとうございます。川岸小学校と岡谷西部中学校というモデルケースということで、お話いただいている中で、川岸地区の中でもこの小中一貫というような議論は地域の住民の皆さんの中にも以前からあって、それが今こういう形で意外とまだそんなに具体的には知られてない部分もあるのかと思いつながりながら話をお聞きしたのですけれども、川岸小学校と岡谷西部中学校でそれぞれコミュニティスクールという形で運営されていると思いますが、同じ川岸の中で、顔ぶれも重なっていたりするのかなと思います。川岸小学校と岡谷西部中学校の連携という部分で、地域の皆さんご協力をいただけていることがあるのか、今

後、何かそういったところで、地域の皆さんにも関わっていただくような構想があるのが、その辺のところも、もしあれば教えていただきますでしょうか。

林 教 頭： 川岸コミュニティスクールというのがありまして、それは既に小中合同でスタートしています。色々な目的や狙いは共有しているのですが、活動は小学校と中学校ともバラバラなのですが、一応、基本的なものがありまして、どちらにも関わってくださる地域の方がたくさん来てくださいます。卒業した子どもたちがOBとして手伝いに来てくれて、ボランティアとして小学校でお願いしているわけではなく、放課後子ども教室「とちっ子ひろば」の運営して下さっている皆さんの声かけによって、集まっていただけの繋がりがあって、子どもたちを繋げて下さっています。

藤 森 委 員： 地域の皆さんをうまく巻き込んでいただいて、そういった趣旨をご理解いただいて、周りから盛り立てていくということもすごく大事だと思いましたので、ぜひ、またそんなところもお願いします。

岩 本 教 育 長： 川岸のコミュニティーづくりと言いますか、非常に地域の皆さんが学校を応援して下さる気持ちがとてもありがたいですね。そしてまた両校ともそれを大事に受けとめながらやっていただいているところで、実はそういう状況が大なり小なり、いろんな地区で今、出来つつあるのが本当にありがたいと思っております。これから一層、そのコミュニティスクールの充実というような点については、国や県の制度も少しずつ変わってきておりまして、さらに充実の方向で、岡谷市も進めているところで、これもまたどこかで議題にして、皆さんにお話をしたり、ご意見をいただこうと思っておりますが、本当に川岸地区はよくやっていますね。

太 田 委 員： 現時点での岡谷市の小中学びの連携の延長線上で目指す姿として、小中一貫校というものを視野に入れて、小中学びの連携を進めているということでしょうか。それとも、連携等の一貫は、その定義の中には体制定義の中に含まれるのですが、今日、お話し伺っていても幼保との連携であり、高校とも連携であり、ある意味もっと広い範囲で、より中身のある連携ということを岡谷市としては、もしかしたら進めていいのかというような感触を持ちますので、そうすると、この延長線上に決して小中一貫みたいな体制があるかということではなくて、もっと中身のある、実のある物事を進めていくというスタンスも感じられるものですから、その辺は現時点では岡谷市としてはどのように考えていると捉えればいいでしょうか。

事務局(両角)： 先ほど教育長先生にお話いただいた通りなのですが、今の将来的な大きな方向性の部分については、やはり市教委、市全体として、これは示していく必要があるだろうというところがあります。こうした時代の背景の中で、従来から学校は小学校があり、中学校がありというのが脈々と続いてきて、平成28年度に制度設計がされて、現在に至っています。全国の状況でも、そういった流れがあるところを踏まえて、すでに策定しているプランのその先で、それをどのように反映したものにしていくかというのは、今の課題として捉えておりますので、定例教育委員会のような部分をきっかけにして、これからの岡谷の小中連携の一貫のあり方といった部分が、形にしていくスタートになるというようなところです。

岩 本 教 育 長： 全国の小中一貫をやっている市長さんの様子を見聞きますと、やはり少子化というのが一番大きな課題になっていまして、少子化を克服していく一つの選択肢として、小中一貫を選んで、特に村や町で非常に子どもの数が激減していて、一つ一つの学校の活力という点では非常に寂しい点があるというような場合には、小中が一緒になって、縦割りだとかそういったものを生かしながら、子どもたちに力をつけていく。そういった方向で小中一貫を選択しているところが非常に多いと思います。岡谷市の場合には、少子化もちろんこれから当然、大きな課題になっていくわけですが、まだ、統廃合ってというような点については、5か年計画では、打ち出してはいないわけです。子どもたちの数の状況を見ながら、今からそういったことも選択肢の一つとしてしっかりと研究してかなければいけないということで、魅力と活力ある学校づくりのプランにも記されているわけです。その一環として、教育委員さんにも知っていただいて、当然、最終的に小中一貫ということも選択肢の一つでありますので、それがベストだという判断になれば、市教委としてしっかりと主導して、やってなきやいけないと思っています。まだまだ研究途上というところで、正直言いますと今、小中一貫校のメリットデメリットというのが、色々なところから出されております。形として小中一貫校としなくても、岡谷市が今やっていることでも、十分できることがあるという思い

があります。あるいは本当に小中一貫としてやることでメリットがあるということもあると思います。その辺をもっとしっかりと研究しながら、また現場の先生の声や地域の皆さんの声をしっかりと聞きながら進めていく必要があると思っています。

林先生、お忙しい中、ありがとうございました。

それでは議題1は以上とさせていただきます。

(林教頭 退席)

○報告

1. 年度末・新年度の行事について (教育総務課)

岩本教育長： 報告事項1について事務局より説明をお願いします。

<事務局(両角) 年度末・新年度の行事について説明。>

岩本教育長： ただ今の内容について、質問や意見はありますか。無いようでしたら、それでは報告事項2に移りたいと思います。

2. 市立岡谷図書館アネックス(別館)の設置について (生涯学習課)

岩本教育長： 報告事項2について事務局より説明をお願いします。

<事務局(山田) から市立岡谷図書館アネックス(別館)の設置について説明。>

事務局(山田)： この事業につきましては、学校図書館と市立岡谷図書館の連携の第2弾といたしまして実施するものでございます。市立岡谷図書館の絵本等を活用しまして、市内の全小学校の1年生と2年生の教室に、学級文庫の位置付けとして市立岡谷図書館別館こちらを設置して、子どもたちに利用してもらうことで、今後身近に感じてより一層の読書への関心を高めていくということを目指し・目的に、しているところであります。各クラスに30冊の本を用意しまして、1か月ごとに入れ替えるシステムで、学校への運搬等は図書館の職員が行う予定であります。

次にエプロンシアターの貸与ですが、こちらは資料の右側の方に三つほど書いてございますが、ポケットのついたエプロンを各学校に配布しまして、図書館司書、学校図書館司書を中心に人形劇に仕立てた読み聞かせ等に活用していただきたいなと思っています。

最後に子どもの読書手帳ですが、お手元に青い小冊子をお配りしてございます。これは図書館職員の手作りですが、こういったものを1年生と2年生全員に配布をしまして、自分が読んだり見たりした本をこちらに記録することで、読書に関心を持ってもらえたらなというところで取り組みをして参りたいと思っています。後ろから3ページ目に100冊達成おめでとう。というところを見ていただくと、これを図書館の簡単に持っていくとちょっとしたプレゼントがありますよという、ちょっと遊び心を付け加えてやっているものであります。第三次岡谷市子ども読書活動推進計画に基づきまして、子どもの発達段階に合わせた読書活動の取り組みを積極的に展開して、読書活動の推進に努めて参りたいと考えております。

岩本教育長： 高木委員さん、ご感想をお願いします。

高木委員： 本は手元があればいつでも手に取れる。手に取らなくても、目に触れるところにあるということが一番大事なことかなと思いますので、各教室に図書館の本が置かれるということで意義のあることだと思います。

この子どもたちのエプロンシアターって、子どもたちは、こういうものも大好きなので、こういうものから、本に親しむということに入っていくてくれれば、こういうものを活用していただければありがたいなと思います。

岩本教育長： 何かご質問ご意見ありますか。

その他、何か報告事項がございましたらお願いします。

<事務局（両角）「親子でチャレンジ集」について説明。>

【要旨】

岡谷市PTA連合会と学校の先生が、新型コロナウイルスの影響により家庭で過ごすことが多くなった子どもと保護者が一緒に楽しめるアイデア満載の冊子を作成。岡谷市のホームページでもダウンロードできる。

岩本教育長：ただ今の内容について、質問や意見はありますか。無いようでしたら、報告事項は以上となります。次にその他ということで、事務局からお願いします。

○その他

・行事等について（各課）

<各課より行事予定について説明>

・その他

岩本教育長：そのほか教育委員さんの方からなにかあれば、お願いいたします。
ほかに無いようでしたら、事務局より次回の開催予定についてお願いします。

<次回開催日確認>

岩本教育長：それでは以上をもちまして、1月の定例教育委員会を終了とします。

午後4時30分終了

岡谷市教育委員会会議規則第23条により署名する。

令和 3年 2月10日

教 育 長

岩本博行

署 名 委 員

草間吉幸

署 名 委 員

太田博久

調 製 職 員

城田 守